知的障害児における漢字の構造意識に関する研究

李 雯 乔

I 問題

漢字は、形態的に構成する要素数が多く、構造が複雑である。これらのことが、子どもにとって漢字の学習を困難にしていると考えられる。漢字は構造が複雑で難しい特徴を持つ一方構造に関する規則が存在する。中国では、漢字の構造規則に対する意識は漢字の識別に影響を与える要因として注目され、研究された。その結果、漢字の構造規則は偏と旁の位置規則、旁の音韻規則、偏の意味規則の 3 つからなることが分かった。さらに、刘(2006)によって、小学校の各段階での 3 つの要因に対する意識特徴や構造意識と漢字の学力の関係も明らかにされた。しかし、日本ではこのような観点からの研究は少ない。また、知的障害児における漢字構造意識もほとんど研究されていない。

中国に比べて日本における漢字学習の開始は遅いため、漢字の構造意識が保障されるといわれる 500 字(刘, 2006)の学習は 3, 4 年あたりである。このことより、漢字の構造意識の形成が遅れて、漢字学習を困難にさせている可能性がある。

一方、精神年齢(以下、MA と略す)が健常の小学校 3, 4 年生と同程度の知的障害児では生活年齢が小学生より長い場合、より長く漢字に接しており、漢字の構造規則を意識しやすい可能性がある。また、漢字の構造規則の 3 つの要因のうち、偏と旁の位置要因は早く習得され、旁の音韻要因と偏の意味要因は遅れて習得される可能性がある。

II 目的

本研究はまず日本において 500 字を学習した児童が漢字の構造規則を意識しているかどうかを調べる。もし漢字の構造規則を意識しているとしたら、その段階で漢字構造規則の 3 つの要因にどのような特徴が見られるのかを検討する。さらに、MA が小学校 3, 4 年生とほぼ同程度の高等部に

在籍する知的障害児を対象にして、漢字の構造規則に関する意識を調べ、知的障害児における漢字の構造規則に含まれる 3 つの要因に対する意識の特徴を分析する。また、小学生の結果と比較することによって、生活年齢が健常児より長い知的障害児は、長く漢字に接することにより、漢字の構造規則を意識しやすいかどうかについて検討する。

III 方法

<実験 1 : 小学生を対象とした実験>

対象 : J 大学附属小学校に在籍する 3, 4 年生合計 124 名。

表 1 3, 4 年の対象児の月齢平均値, SD および人数

	月齢平均	SD	対象児群の人数
3 年生	109.76	3.67	n=58(男子 33 名, 女子 25 名)
4 年生	122.76	3.09	n=66(男子 31 名, 女子 35 名)

手続き : 課題は刘(2006)を参考にして作った。課題は偏と旁の位置要因、旁の音韻要因、偏の意味要因を検討する 3 種類の課題各 10 問。いずれも 3 択。解答方法を説明してから課題と鉛筆を配り、クラス毎に一斉に実施した。

<実験 2 : 知的障害児を対象とした実験>

対象 : 養護学校の高等部 1 年～3 年で、一般就労を目指す程度の生徒 39 名。

手続き : 実験 1 と同じ手順で行った。ただし、偏の意味要因課題では、実験者が問題ごとに課題文を読みあげた。

漢字課題の実施後、人物描画課題を行った。

IV 結果

実験 1 には、偏と旁の位置要因課題について、

表 2 3, 4 年生各要因課題の結果一覧表

	偏と傍の位置要因					傍の音韻要因					偏の意味要因		
	人数	仮字		非字		人数	傍		偏		人数	意味	
		選択数	選択率	選択数	選択率		選択数	選択率	選択数	選択率		選択数	正解率
3 年生	42	193/294	65.65%	101/294	34.35%	57	183/271	67.53%	88/271	32.47%	56	306/392	78.06%
4 年生	42	203/294	69.05%	91/294	30.95%	58	182/267	68.16%	85/267	31.84%	61	375/427	87.82%

表 3 知的障害児各群各要因課題の結果一覧表

	偏と傍の位置要因					傍の音韻要因					偏の意味要因		
	人数	仮字		非字		人数	傍		偏		人数	意味	
		選択数	選択率	選択数	選択率		選択数	選択率	選択数	選択率		選択数	正解率
MA が 1SD 範囲内 群	8	40/56	71.43%	16/56	28.57%	11	38/51	74.51%	13/51	25.49%	9	50/63	79.37%
MA が より低 い群	17	75/119	63.03%	44/119	36.97%	24	81/107	75.70%	26/107	24.30%	21	118/147	80.27%

3 年生も 4 年生も非字より仮字の選択率が高かった。3 年生と 4 年生の間では大きな差が見られなかった。傍の音韻要因課題について、知らない漢字の読みを決めるとき、3 年生も 4 年生も傍の音読みに注目していた。3 年生と 4 年生の間では大きな差が見られなかった。偏の意味要因課題については、正解率が高かった。3 年生より 4 年生は正解率が約 10%高かった。

実験 2 には、人物画知能検査の結果によって、知的障害児の精神年齢（以下、MA と略する）を求めた。小学校 3, 4 年生の生活平均年齢と標準偏差を参考にして、知的障害児を「MA が 1SD 範囲内群」と「MA がより低い群」の 2 群に分けた。偏と傍の位置要因課題について、両群とも非字より仮字の選択率が高かった。傍の音韻要因課題については、知らない漢字に対して、読みを決めるときは、両群とも傍の音読みに注目していた。偏の意味要因課題については、正解率が高かった。

V 考察

本研究実験 1 の結果によって、日本において 500 の漢字を学習する 3, 4 年生は漢字の構造規則の 3 つの部分に対して、意識していることがわかった。そして、500 ぐらいの漢字を学習することは、漢字の構造規則を意識するための基礎(刘, 2006)だということが証明された。

3, 4 年生は偏と傍の位置要因における仮字の選択率と傍の音韻要因課題における傍の選択率の間に大きい差が見られなかった点について、日本では低学年が学習する漢字の数は少ないけれど、形声字や合体字の部品になる独体字が少なくないことと 3, 4 年生は 1 年生より語彙力や構文力などが発達している 2 点を考えられる。偏の意味要因課題に対する正解率は仮字の選択率や傍の選択率より高く、差が見られたことに対して、意味規則は音韻規則の不足を補完して、漢字能力の発展を保障していた特徴を見られた。さらに、偏の意味要因課題に対して、3 年生より 4 年生は正解率が約 10%高かったことより、日本においても、4 年生では意識は機能に変わって、自動的に漢字を

識別する段階に至ったということを示した。

一方、知的障害児を対象とした実験 2 の結果によって、漢字の構造規則の 3 つの部分に対して、「MA が 1 SD 範囲内群」も「MA がより低い群」も意識していることが分かった。

群ごとに分析した結果、偏と旁の位置要因について、両群とも偏と旁の位置要因に意識していると考えられる。旁の音韻要因について、文字の読みには、語彙力や構文力などの発達が前提として考えられる(河井, 1979) ことによって、2 群とも生活年齢が長く、豊富な生活経験を通して、語彙力や構文力を身に付けて、そして身に付いた語彙力や構文力によって漢字構造規則の音韻要因規則を意識すること、つまり旁を利用して、未学習漢字を命名することを促す可能性があると考えた。偏の意味要因について、両群とも正解率が高かったことにより、意味規則は音韻規則の不足を補完する特徴が見られた。

課題ごとに両群それぞれを 3, 4 年生と比べて見ると、3 つの課題において、知的障害のある子どもは生活年齢が健常児より長く、より長く漢字に接するため、より早めに漢字の構造規則を意識していた可能性が示唆された。

偏の意味要因について、両群とも正解率が 4 年生より低いことが見られた。刘(2006)は 4 年生では偏の意味規則に対する意識が機能に変わって、自動的に漢字を識別する段階に至ったという結論があった。本研究の実験 1 でも同じ傾向が見られた。知的障害のある子どもは生活年齢が健常児より長く、より長く漢字に接するため、より早めに漢字の構造規則を意識するとしても、その意識を機能に変えることが遅れる可能性があると考えられる。

VI 結論

本研究には、500 ぐらいの漢字を勉強した 3, 4 年生でも知的障害児でも漢字の構造規則を意識していた。漢字の構造規則の 3 要因に対する意識の特徴とは、3 年生の場合、位置規則と音韻規則が発展する上で、意味規則が音韻規則を補完する役

割が見られるという点である。4 年生の場合、3 年生が示した特徴のほか、さらに、意味規則に対する意識が機能化の特徴が見られた。知的障害児の場合、位置規則と音韻規則が 3, 4 年生と同じく発展しているが、音韻規則に対する意識が 3, 4 年生よりよく意識していることが明らかとなった。意味規則に対して 3 年生のように音韻規則を補完することが見られたが、意味規則に対する意識が機能化するという特徴は見られなかった。

知的障害のある子どもの生活年齢は健常児より長く、より長く漢字に接するため、漢字の構造規則を意識しやすいことが分かった。

VII 今後の課題

今後、日本において漢字の構造規則を意識することと習得した漢字数との関係については小学校低学年もしくは入学前の子どもを対象にしてしらべること、そして、各段階で漢字の構造規則に対する意識の特徴を明らかにすることを行うべきだと思う。さらに、漢字の構造規則を意識することと習得した漢字数との関係や、各段階の漢字の構造規則に対する意識の特徴を漢字学習支援の新たな観点として、漢字教育の実践に活かすことが重要だと考えている。

以上の課題は知的障害児の漢字教育領域でも行うべきだと思う。その他、知的障害児において意味規則に対する意識が機能化するのは遅れる可能性も示唆された点について、その原因や解決方法を今後研究する必要があるであろう。

文献

刘翔平 (2006) 儿童识字能力与汉字规则意识关系研究. 中国特殊教育, 67, 56—61.

河井芳文 (1979) 言語発達診断検査. 田研出版.